自分の人生を自分で生きる子どもに

前川良太

子どもの自主性、主体性を大事に…なんだかテンプレートのように保育の研修や保育・育児書で見聞きする言葉です。そんなこと当たり前だと思うかもしれませんが、そのことの意味をよくよく考えたことがありますか？

先日パート職員の会議で、主体性とは何かというテーマで話し合いました。給食パートの桶やん（桶谷調理補助）は主体性とは「自分の人生を自分で生きること」と表現していましたが「主体性と自主性は似てるようで違うようで…」とも話していました。また、普段温厚なみほちゃん（籠池保育士）が４歳児の子どもとバトルした話題から「その子の主体性が爆発したおかげでみほちゃんの主体性も開花した」と笑い合いました。

よくいろんな職員から「子どもがどうしらたいいかと些細なことでも大人に尋ねに来る」という話も聞きます。そんな時どう返すの？と聞けば「自分で考えてみてと問い返す」と言います。またほかの職員は夕方の親子の姿を見て「長い間子どもに付き合って園庭で遊んでるけど大変ちゃうんかな？」とネガティブな印象を受け、同じ光景を見て別の職員は「ゆったり子どもと関わってててええなぁ」とポジティブなとらえ方をします。なるほど、保育園という場所は子どもの主体性をどうとらえるかという問題は、日常の中にたくさん転がっているのですね。

先月5歳児のお泊り保育が無事行われました。子どもたちのやりたいこと盛りだくさんの2日間でした。だけど少しそこに至るまでには、大人の葛藤と紆余曲折ありながらの道のりでした。担任と実行委員そろっての第1回の会議は、例年の行程表に当てはめながらどんなことを計画していくかというスケジューリングから始まりました。そんな会議をひっくり返す形で、「もっとこどもが1日の生活ってどんなことが必要か考えるところから始めたら？お風呂も決まってるから入るんじゃなくて、そういえばお風呂どないしよう？って気づくところからやで。」と話しました。親から離れて過ごす2日間。私たちが親代わりになるのならもったいない。自分で生活を創ることこそお泊りの醍醐味だからです。そこから担任は子どもたちと「生活する」ということに徹底して、保育園だからみんなと一緒だからこそやりたいことを丁寧に語り合いながら創っていきました。

前日、お泊り前健康診断と称してぞう組一人ひとりと話をしました。「心臓どくどくしてるわ！なんか心配ごとあるか？」と聞くと「いつもママと一緒やから寝られるか心配」「クッキング失敗せんか心配」といろんな心配ごとが出てくる出てくる。そんな中、ある子は「家でいつも一緒に寝てるから人形持ってきていい？さみしいから」と言うのです。そんな子に私は「みんなのお泊り保育やねんからぞう組のみんなに聞き。お泊り何するかみんなで決めたのと同じやで。」と返しました。そして「持ってきていい？」と事情をみんなに説明して「いいよ」と言ってもらい、晴れて人形とともにお泊りを乗り越えたのです。（深夜の暗闇に浮かび上がる人形のほほ笑み、少しホラーでしたが…）

子どもの主体性と聞くとどんな印象を持ちますか？子どもに身に着けてほしい力ととらえると、それは子どもの課題となります。本当にそうでしょうか。子どもはみな本来主体的です。子どもは大人が育てるのではなく、風土・風景から発見し学び取る力を持っています。特に保育の集団の中で大切なのは、子どもの発言がしっかり集団に影響すると実感することです。桶やんの言う通り日々を自分の力で生きている実感です。ルールは大人が決めるのではなく、一人ひとりの意見が大事にされ、自分たちが納得して決めていく民主的な風土づくりが大切です。だけど思いがなんでも通るという意味ではありません。私は子どもたち（我が子も）のことを“共同生活者”と思っています。だからこそ「君も君の責任は果たしてや」と言います。責任は役割と言い換えられるかもしれません。大人の管理に慣れた子は、聞き分けもよく一見するとやりやすい子でしょう。だけど次の社会を担う市民を育てるのが保育です。子どもの主体性は個人の課題ではなく、集団の、社会の課題として見つめることが大事なのではないでしょうか。